日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	「この重きバトンを」における人格発達
著　者	石橋通江
掲載誌	三浦綾子の癒し ： 人間学的比較研究. pp 237-263.
発行年	2004
版	publisher
ＵＲＬ	http://id.nii.ac.jp/1127/00000375/

＜利用について＞
・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社（学協会）などが有します。
・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
・ただし、著作権者から著作権等管理事業者（学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど）に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

日本赤十字九州国際看護大学. 2015.

一、はじめに

この章では、三浦綾子作の小説「この重きバトンを」[1]に登場する父子の言動を分析し、その心理的葛藤が人格発達へと変化していく過程について考察する。

考察の方法は、テキストの各節に沿って主人公の人格発達段階を、エリクソンの人格発達図式を参考にしつつ解釈する。また、息子の発達段階に関しても同様に言及する。

なお、エリクソンは、人格発達について次のような原則に立って考察している。

第一点　誕生から死に至るまでのすべての発達段階が人格の形成過程だと考え、これをライフサイクル（人生周期；life cycle）という用語で表わしている。

第二点　ライフサイクルは八つの心理・社会的発達段階に分けられ、それぞれの段階で解決されるべき危機としての課題をもち、それぞれを乗り越えることでその時期特有の心理的な力を獲得するという「漸成的発達」を説いた。[2]

この作品は青年期にある息子の未熟さに対して、主人公が自分の人生を編年体で述懐する形式で記されており、その時間の流れの中に主人公の人格発達を観察することができる。また老年期にある主人公は、人生の統合の時期にあたり、息子は自己確立の時期にある。いずれも、人格の

形成過程においては重要な時期であり、エリクソンの主要概念である「自我同一性（Ego Identity）」の揺らぎが生じやすい。よって登場人物の言動の中から心理的葛藤について分析し、それぞれの自我同一性の形成過程を追うことで、社会や生活環境、対人的環境が自我形成に及ぼす影響について考察できるものと考える。

ところで、この作品は「あとがき」に示されているように、一九六九年『ジュニアライフ』に掲載されたものである。作者三浦の言葉によれば「理解を深める　明治・大正時代の十代の生活を知ることは、現代の私たちにとって、非常に大切なことだと思う。それを知ることによって、私たちの人間への視野が広がるに違いない。理解が愛を深める。その愛がまた理解を深めるからである。そして、現代に生きる自分たちの生活を、さまざまな角度から反省することにも役立つに違いないと思うのである。」と述べている。戦後日本の高度経済成長期に書かれたこの小説は、小此木啓吾の言うモラトリアム[3]にある青年期の自我形成をテーマとした作品となっている。そこには、戦後の父子関係における批判も同時に語られている。

このことをふまえて、まずは小説の流れにそって登場人物の行動の意味を分析し、その後作品に込められた作者のテーマについて考察を深める。

二、「まちがっていた私」――それぞれの命題――

この節では、まずそのストーリーを確認する。

この箇所の物語の主人公は明治生まれの七十二歳の父（鶴吉）と、戦後生まれの二十歳の息子（明）である。その鶴吉が息子明に対して行ってきた養育に対する深い反省として示される。

明　…「じいさん、小づかいをくれよ」

鶴吉…「なんだじいさんとは」

明　…「七十二にもなったら、じじいじゃないか」

鶴吉…「親に向かって、なんという言葉だ」

明　…「へぇー、親だって？　じいさん、あんたほんとに、おれのおやじさんのつもりかい」

鶴吉…「明、おまえいま、なんといった」

明　…「やっぱり、痛いところを突かれたんだね。顔色が悪いよ、じいさん」

鶴吉…「ばかなやつだ。おまえはおれの息子にきまっているじゃないか」

明　…「ちぇっ、こんなじじいが、おれのおやじだなんて、笑わせらあ。じいさん、おれ

の友だちのおやじはね、みんな、まだ四十代か、せいぜい、五十代だぜ」

鶴吉…「だからいっているだろう。おまえは戦後に生まれた子だって」

明　…「そうかねぇ。まあ、そんなことはどうだっていいや。金をくんなよ」

明は、足もとのホースをにぎると、鶴吉の背をめがけて、水をあびせかけた。さすがに鶴吉はふり返った。しかし、ふり返っただけで、彼は黙って、家にはいってしまった。（六二～六三頁）

息子明の言葉には、親である鶴吉に対する畏敬の念は感じられず、背中に浴びせた水が象徴するように、罵倒のごとく鋭く発せられる。それは「じじい」の一言が表わすように、「老い」に対する侮蔑であり、エリクソンが言う老年期の不協和の特性である「侮蔑」[4]を刺激するものであった。しかし鶴吉は、「老い」に対するこの侮蔑の言葉を父に向かって発した息子に対して怒りを感じるのではなく、むしろ悲哀をこめて妻に次のように語っている。

鶴吉…「背中に水を浴びせられたようだという形容があるが……明はどうしてあんなになったのかねぇ」

友江は、ふっくらとした色白の、どこにもけんのないやさしい顔をくもらせた。

友江…「大学をすべってからですわ。それまでは、やさしいまじめな子だったんですのに」

鶴吉…「そうだなあ、何かいらいらと、突っかかりたくてたまらないんだろう。しかし、わたしは、それだけではないような気がするんだ」

友江…「なんでしょう」
鶴吉…「うん」
鶴吉はこたえずに庭に目をやった。すでに明の姿はどこにも見えない。
鶴吉は「じじい」といわれたことを妻にはいいたくなかった。それは、だれにもいいようのない深い淋しさであった。七十二歳の自分に、二十歳のむすこひとりしかいないということを、他の人間はどう考えているのだろうか。(六四頁)

これによれば、明は大学受験を失敗し、それが契機となって「同一性の拡散」が始まったことを示している。さらに以下の明の行動に、鶴吉と友江の明に対する養育態度による影響が現われている。

それから二日ほど、明は友だちの家を泊まり歩いて、家に帰ってこなかった。明は父も母もおそろしくなかった。いや、それでも、母の友江のほうが、どこかおそろしいところがあった。だが、鶴吉にいまだかつてきびしく叱られたことのない明には、鶴吉は自分の下僕か何かのように、自由になる人間のように思えてならなかった。(六七頁)

さて、以上のストーリーから、鶴吉、明それぞれの問題があることがわかる。それは、人格発達段階の課題でもある。

明の反抗的な態度とそれを悲哀をこめて見つめる鶴吉と友江の姿から、これまで鶴吉夫妻が明にとってきた養育態度は、「甘やかし」であったと解釈できる。

詫摩武俊・依田明の研究[5]によれば、親の養育態度と子どもの性格に関係する研究から両者の関係は明白ではないものの、親の「甘やかし」は、子どもの性格が〈わがまま、反抗的、幼児的、神経的〉になるとしている。この小説が書かれた当時の研究であり、明の甘えの行動も、これらの研究に示されていることと符号する。

さて、次に明の起こした「同一性拡散」について述べてみる。エリクソンによれば「青年期の若者達は、自分が自分であると感じる自分に比べて、他人の目に自分がどう映るとかそれ以前の時期に育成された役割や技術を、その時代の理想的な標準型にどう結びつけるかといった問題に、時には病的なほど、時には奇妙なほどとらわれてしまう。そして新しい同一連続性と不変性の感覚を求めて、ある種の青年達は、子ども時代の危機の多くと改めて戦わねばならないが、まだ最終的な同一性の守護者としての永続性をもった偶像や理想を確立する準備がととのっていない。」[6]と分析している。

つまり、「自己と他者に映る自分のズレ」や「これまでに獲得した役割や技術という現実とその時代の理想的な標準とのズレ」にとらわれ、不安定な自我状態を伴うとしているのである。これまで何不自由なく、望むものすべてを手に入れて過ごしてきた明の過去の現実と、受験という競争社会の中で受験に失敗して自らの望む可能性（大学生）が絶たれたことで生じた不安定な自我状態、それを乗り越えようとしない明の態度、これらに「同一性の拡散」状態がみてとれる。すなわち、エリクソンの言う青年期の「役割拒否」である。

さらに、反抗的な明に「同一性の拡散」の状態が起こっていることを感じた鶴吉もまた同じように、アイデンティティの危機状態にあった。明の反抗の原因が年老いた自分にあること、「甘やかし」の養育態度に対する反省。そして、鶴吉は自分の人生を振り返り、自分の人生を息子にノートをつかって、以下のように語り始める。

「『明、おとうさんはいま、自分がまちがっていたと、つくづくおまえにもすまなく思っている。私がもし、おまえにもっときびしく、叱るべきときは叱り、注意するべきときには注意してきたなら、けっしておまえのようなひよわな、ぐうたらな人間はできなかったにちがいない。私はまちがっていたのだ。自分の小さいときを思い、たったひとりのわが子であるおまえには、何ひとつ苦労をかけまいと、ただおまえの望むとおりに、なんでもいうことを聞いてきた。〈中略〉このノートに書いてある私の歩んできた道は、おかあさんにもほとんど話したことがない。私はひそかに、自分の過去を書いておいた。私が死んだ後、明、おまえに読んでほしいと思ってきたものなのだ。だが、生きているうちに、このノートを見せなければならないときがきた。読むのがいやならそれならおしまいだ』」

（六八～六九）

鶴吉は、これまで隠してきた自分の過去を、なぜ語り始めたのだろうか、隠していた過去をなぜノートに書き記していたのであろうか、そして自分が死んでから読ませようとしていた過去をうちあけるのがなぜこのときだったのであろうか。

三、「うちには帰るな」

鶴吉のノートに記された内容はまさに「自分史」である。小林多寿子によれば「自分史は、現在の自己がなにものであるかを過去にさかのぼって探求するために、書かれる。現在の自己のアイデンティティを探るという動機は、『自分探し』の自分史にもっとも鮮明にあらわれている。過去の自己への連続をたしかなものにするために、自己の物語がつむぎだされる。」[7]として、とくに老年期に書かれる自分史の多くが自我の連続性を確認するために必要なことであることが示されている。

明治時代から大正時代に生きた鶴吉の出生から青年期までを記した内容から、鶴吉の生活の経緯とそれにともなう自我形成の過程を列記し、エリクソンの人格発達論に基づいたライフサイクルにそって分析する。

〈出生～遊戯期〉

小説の中で鶴吉は、一八九八年（明治三十一年）九月八日江別の村に生まれる。そして、この誕生日こそが、父の命日なのである。石狩川の大洪水の日、助産婦を呼びに出た父は帰らず不安のなか母はひとりで鶴吉を生んだ。その誕生悲話を幼い鶴吉は、母から何度も聞かされていた。

鶴吉はそんな母の姿を「母は、それを聞く私の悲しさを思いやるだけの、やさしさを持っていなかったのだろうか。」と記し、同時に「おまえの命は、おとっつぁんの命と引きかえに生まれたんだ。おとっつぁんのぶんまで生きてくれ」と言いたかったのかもしれないと解釈している。そして、二人の子どもを抱えながら、野良で根限り働く母の姿をみつめながら育っていく。

〈学童期〉

母から「鶴吉、おまえはまだこまくっても、男の子だからな。男というものは、一生働かなくちゃあなんねえもんだ」と言われ、一年生にあがるころになると鶴吉は野良で働き始める。

十も歳が老けて見える母の姿を目の当たりにしながら、鶴吉は年季奉公の話をもちかけられ、「どんなことがあっても、うちに帰ってきてはだめだよ。なんぼ逃げて帰ってきても、かあさんは家に入れないからな。兵隊検査までは、どんなことがあっても、がまんするんだよ」と言う母の言葉に母との別れを実感する。

母を思い、母の言葉に揺り動かされるようにすすんでいく。

〈青年期〉

一九〇八年（明治四十一年）鶴吉十歳のときに十年間の年季証文をもとに、大きな呉服屋で年季奉公を始める。初めは、慣れない環境に泣いてばかりいる鶴吉であったが、あるきっかけから「人のやった仕事とはちがう仕事をする人間になろう」とする。そのきっかけとは、番頭から叱られたときに声をかけてくれた二歳年上の店のお嬢さんユキとの出会いだった。鶴吉は、「なぐ

られるのが口惜しいなら、なぐられないような仕事をなさい」「鶴吉が叱られると、わたしも口惜しい」と言うユキの言葉に愛情を感じ、母に恋する子どもから脱皮する。

いっしょに口惜しく感じてくれるユキの存在が大きな慰めとなり、「叱られないような仕事をする」から、「ほめられるような仕事をする」気持に変化する。そして、「さすがに鶴吉の仕事だ」「鶴吉を見習え」と主人や番頭に言われるまでに信頼された。そして、その語りは第三節へと展開していく。

エリクソンは、乳児期の基本的強さとして「希望」をとりあげ、これは想像したり、一歩踏み出したときでも、期待に満ちた飛躍を促す自由感を未来に付与するものであると言う[8]。

鶴吉は、母から愛情を注がれながらも「父の死と引き替えに生まれた子」という重い十字架を背負うことになる。食べるものさえままならぬ不安な生活の中で、「鶴吉、おまえはまだこまくっても、男の子だからな。男というものは、一生働かなくちゃあねえもんだ」と一家の大黒柱としての役割を母から求められる。鶴吉は、自らの希望を持ち得ないまま母に依存し、その反面で母を守っていかなければならないことを幼いながらも感じている。

野良仕事に明け暮れながら義務教育を終わった鶴吉は、家族との別れを体験し年季奉公にでる。幼い旅立ちは、外力で鶴吉の自立を促すが、乳児期から幼児期において母だけを見つめてきた鶴吉にとって、母を失った悲嘆のほうがおおきかった。そして、乳児期の対立命題である「基本的信頼対基本的不信」のバランスが保てないまま、それを乗り越えられず、周囲を受け入れず

に泣き続ける日々を送る。

それが変化したきっかけは、奉公先の一人娘のユキの存在であった。ユキは、母性的な愛情を持ちながら接し、同時に社会性を示していく。いわば、異性であるユキからの愛情を感じながら社会における「しつけ」がおこなわれたのである。鶴吉は、仕事をする中で自分の欲求をコントロールし、喜びや社会に受け入れられる行動様式を身につけていく。

学童期は、何かを作りそれを完成させるという感覚を追求する時期であり、この感覚をエリクソンは「勤勉性」と呼んだ。ものを作る喜び、作ることで他者から自分の存在を承認して貰う喜び、この両者を保証されることが大切である。現在の力では解決できない課題ばかりであれば、自分は何かを為しえないという感覚、「劣等感」が生じる。これが、この段階の危機である「勤勉対劣等感」である。したがって、この段階では「自分は何かを達成出来る人間である」という感覚の獲得が重要であると言われる[9]。

「叱られないような仕事をする」から、「ほめられるような仕事をする」という気持の変化は、このユキとの関係性から生まれた「意志」であり、ユキの愛情に包まれた基本的な信頼感の獲得や、母に委ねられていたすべてが、自らの意志をもって目的に向かうという、エリクソンの言う幼児期初期から遊戯期までの命題の達成に導くことができている。遊戯期で得られた意志力は、その後の人生の本質的な力となると言われており[10]、ユキの支えの中で展開される勤勉さは、学童期の命題である社会における「適格」をより際だたせることになっている。

四、「愛にめざめる」

一九一三年（大正二年）鶴吉十五歳のとき、十七歳のユキに縁談の話がくる。その話をきいた鶴吉は、思いがけない大きな打撃を受け、知らず知らずのうちにお嬢さんの存在を、自分の生きがいとして、生きてきたことに気づく。結納の前の日に自分の気持を告げることができなかった鶴吉であったが、結納の日に結核でたおれ破談となったユキを献身的に看病する機会を得る。

「このお嬢さんの病気ならうつってもかまわないと思うほどいとしいと思った」と言う鶴吉の愛情が献身的な介護の姿にうつり、「こんな日が永遠につづいたら」と二人に思わせながらときが過ぎる。店の主人は鶴吉の献身的な姿に、婿入りを希望するが、鶴吉は十年もの恩義と貧しくとも長男であることで実家を守る役割のあることから申し出を断る。ユキは、鶴吉に結納金ほどのお金をわたし、鶴吉も「お嬢さん、わたしは、嫁などもらいません。」と言って別れる。

人生五十年、十代で結婚し子どもをもうけた明治・大正期の人たちは、恐らく今の世代の人たちとは違った速さで成長したのであろう。まだ年端も行かぬ学童期に大人社会の中に混じって働くため、職業的アイデンティティや「親」としてのアイデンティティの確立は早期でしかも容易であったと考える。

青年期にはいった鶴吉は奉公先の店で得た信頼から、職業的アイデンティティの役割と、ユキへの愛情によってユキの世話をするということで協力関係におけるパートナーシップの役割を獲得していた。ユキへの献身的な介護の姿に青年期の基本的強さと言われる「忠誠」を感じさせられるのである。しかし、十年の年季明けとユキとの生活の中断によって成人期にまで達していたと思われた心理・社会的発達は、拡散し前成人期へと後退する危機に見舞われた。

五、「充実した人生」

一九一八年（大正七年）鶴吉二十歳。年季が明け、実家に戻ると母が待っていた。そして、「だんなさん、わたしはな、この子が奉公に出てからきょうまで、風に雨戸がガタガタしても、もしや鶴吉が逃げて帰ったのではないかと、なんぼハラハラしたか、わかりません。つらければ帰ってこいというのが、母の情けというものです。それなのに逃げてきたら、この証文にあるとおり、一日いくらの金を返さねばならん。金がないばかりに。鶴吉、ああ貧乏は、おっかさんを鬼にしてしもうた。」と母がこころのうちを明かす。母の価値観はお金が人を幸せにするというゆがんだものであったが、主人から再度の婿入りの話がでると「家よりもみんながしあわせになって、おまんまを腹一杯たべるほうが、どんなにいいやら。」と笑いとばしたことによってユキ

との結婚が成立する。

その後、寝たり起きたりの生活を続けるユキを見守りながら、「鶴吉は勤め人のように、くるくると店でよく働き、そして、暇をみてはユキの看病をするだけの生活」が二十年近く続く。しかし、時代は戦渦に追われ鶴吉は兵隊に取られ、出征する。その留守の間に、消息の途絶えた家族は死別・離散をし、敗戦後日本に戻って自分の愛したユキも家族も店もすべてを失ったことを知るのは、鶴吉四十八歳の暮れであった。

鶴吉は孤独に苛まれ自堕落な生活を送る。ただ雇われるままに仕事を続けるうちに酒を飲むことをしり、そのことによって飲食店を経営する友江に出会い、再婚する。

戦後に知り合った二十歳も歳の違う妻友江と、そして二人の間に生まれた息子、結婚を機に自らの才覚で展開した不動産業で財を得て生活を続けていた。第一章で起きた父子の事件は、そんな一見平穏そうに見えた家庭で起こった出来事だった。

鶴吉は、自分の人生をつづったあと、自分の人生の意味を自らに問い続ける。

「もし、あの戦争がなかったらと、私はいく度口惜しがったことだろう。」

「ともあれ、私が三十年マル三の家で働いて得たものは、無一文と孤独の境涯だけであった。無駄な人生だったと人はいうかもしれない。」

「だが、私は、私にとっての五十年の人生が、まったくむだだったとは思えない。私は、戦友が、塹壕のなかで、ポケットから出した小さな本をひらきながら語ってくれた言葉

を、いまもはっきりと思い出すのだ。」

「『汝ら互いに重荷を負え』」

「『汝の十字架を取りて歩め』」

「私は母のために生き、ユキのために生きた。そして、これこそが自分を真に生かす道だったと思う。自分の人生は、やはり充実していたのだとしみじみ思うのだ。」

「私はこの重荷を、ただひとりの、血をわけた息子の明にだけは負わせまいと、まちがって生きた。自分自身の重荷を負うこともできないヒョロヒョロの意気地なしに、私はおまえを育ててしまった。ほんとうの愛が私にあったなら、いかなる重荷をも負うばかりか、他の人の重荷まで負って、がっちりと自分の足であゆんでいく、たくましい生き方こそ教えるべきであった。

明、おまえは私をじじいだというが、五十二歳になって初めて、自分のこどもを得るという男の人生が、どんなものであったか、わかってくれたろうか」(九〇～一〇〇頁)。

前成人期の危機状態にあった鶴吉の人生が、年季明けて実家に戻る時点での母の登場によって一変する。貧しさの中では厳しさだけが際だっていた母の真の愛情に触れ、先が見えなくなっていた人生に希望の明かりをともす。

さらにユキとの生活は、前成人期の対立命題である、「親密対孤立」のバランスを親密に傾け、次なる発達段階への方向をしめした。しかし病弱のユキに敢えて子どもはのぞまず、店の発

展によって次の対立命題である「生殖性対停滞」のバランスを生殖性へと傾け、それをユキへの世話として形にした。

しかし、戦争という神の怒りにもふれる出来事が、鶴吉の人生をまた「孤立」の世界へと導いてしまう。重要他者の死は、人を悲嘆の渦に巻き込み、その心の葛藤は人を退行させる。鶴吉の発達段階は再び生殖性、親密性を失い、同一性の拡散状態へと転落する。

中年期には、さまざまな心身の変化を経験する。これらの変化が否定的なものであれば、個人の自我同一性に影響を及ぼし、自己の内外の変化の体験を契機に、「自分の人生はこれでよかったか」、「本当に自分らしい生き方とは何か」という同一性の見直しが行われる。これがいわゆる「中年期の同一性の危機」である。[11]

三浦は、鶴吉に語らせる。「もし、あの戦争がなかったら……」「三十年マル三の家で働いて得たものは、無一文と孤独の境涯だけであった。」などと悔やませる。

鶴吉は、戦争の為にすべてを失い、自堕落な生活を送る。まさに「中年期同一性の拡散」状態である。その後、友江の信頼を得て、友江との新しい生活を始める。そして、それまでの自分の人生を振り返って「母のために生き、ユキのために生きた。……自分の人生は、やはり充実していた」と言う。

鶴吉は戦場で聞いた戦友の聖書の言葉「汝ら互いに重荷を負え」「汝の十字架を取りて歩め」が持つ力を知っていた。そして重視する人生の視点を、自己から母やユキという他人に委ねるこ

とで、人生の充実感を達成する。ここに、「中年期同一性拡散」状態を再体制化し、「同一性の達成」を果たしたのである。

同一性の拡散によって生じてくる退行は、時間の中で心が癒され再び人への信頼感が得られるようになることで回復する。三浦はさらに続けて、自らの苦労に囚われ没入して、子どもにはそれを与えまいとして甘やかして育てた「停滞」、それに気づきそれを乗り越えるために、自分の生み出したものをはぐくみ育てるために厳しく聖書の言葉を与えて、若い世代に教え、導く「生殖性・生産性」をも、見事に描き出すのである。

また、鶴吉の「明、おまえは私をじじいだというが、五十二歳になって初めて、自分のこどもを得るという男の人生が、どんなものであったか、わかってくれたろうか」という語りは、同時に鶴吉の自分自身への語りかけである。

小林多寿子は、自分史について「物語られて作品となった過去の自己は、現在の自己から切り離すことができる。過去の自己を振り返り、整理することは、その当時の経験を秩序付け現在に理解可能な説明を行う。」とその効果について述べている。[12] 整理することで自分の人生の意味を知り、それを子に伝えることで、エリクソンの言う「英知」を得、老年期の命題である人生の「統合」へと向かわせた。そして、自己の統合が世代の循環の中で生かされていくこととなる。

六、結論と課題

三浦がこの作品に与えたメッセージは、「汝ら互いに重荷を負え」「汝の十字架を取りて歩め」という聖書の言葉で示されている。新約聖書のマルコ伝八・三四～九・一に示されるこの言葉は、「キリストが背負われた重荷を自ら同じように負いなさい」という意味で一般には使用される。しかし、これはまさにこれまで述べてきたように、エリクソンの言う自己の統合が、世代の循環の中で生かされていく過程について述べられているようにも解釈できる。

人が生まれながらに持つという「原罪」をこの作品では、父の死と引き替えに生まれた命として設定することで、より強調されるかたちになっている。そして、その原罪を母やユキという他者への献身で償おうとした姿で描こうとしたのである。

さらに、この聖書の言葉の持つ意味を人格発達の側面から捉えてみると、鶴吉は誕生時に父と死別し、父の姿を全く見ていない。ユキとの夫婦生活では、自らの「父性」を示す必要はなかった。しかし、年老いて生まれた子どもに対して、次世代の養育と指導に対する興味・関心を意味する「生殖性」の課題に直面せざるを得なくなった。

それまでのライフサイクルの中で、母やユキによって与えられた発達課題は、「勤勉」や「慈

しみ」といういわゆる「母性性」が主体であった。鶴吉には、「父性性」に代表されるフロイトの言う超自我（Super Ego）のもつ規範や命令・指導の役割を獲得するための、その雛形となるべき手本はなかったのではないかと思われる。したがって、我が子に対して「文字通り慈しみ育てる」、言い換えれば、「甘やかし」の養育を取らざるを得なかった。

それが、我が子である明から文字通り「背中に水を浴びせかけられる」ことにより、「父性」の意味を悟り、「汝の十字架を取りて歩め」という聖書の言葉を、自らと我が子に課することで、作者の三浦は父と子の関係を「象徴的」に示そうとしたのではないのであろうか。

最期に、作者である三浦綾子のライフサイクルにみられる危機とその克服を簡単に述べてみる。三浦自身が自叙伝である「道ありき」[13]三部作[14]と「命ある限り」[15]の中で語っているように、戦争によっていままで信じてきた教育的価値が変えられたこと。そのことで子どもたちへの罪悪感をいだき、結核という当時は不治の病の床にあって自暴自棄な生活を送ったこと。キリスト教への入信によって救われた命、その自分の命の引き替えになくしてしまった恋人の命。病気とともに生きることを約束してくれた夫。それらさまざまな人生の節目の中で悩み苦しみながら三浦自身が自らの人生の指針を獲得してきたことがわかる。

三浦は、鶴吉と明という孫ほど年の離れた親子を題材にして、世代によって異なる価値観を示して両者の違いを際だたせ、その中で解決すべき問題を模索することの重要性を表現しようとしたのである。そのようにみれば、人は社会的な制約を受けながら人と人との具体的な関係性との

中で互いに成長し変化していくものだと考えることができるのである。

なおこの章では紙幅の関係上、小説のコンテクストを追うことに終始し、自我形成についての十分な考察を割愛した。

――註――

(1) 三浦綾子『雨はあした晴れるだろう』角川書店、角川文庫版、一九九八年／二〇〇〇年、五九～一〇〇頁。

(2) Erikson, E. H. *Identity and the life cycle*, International Universities Press, New York, 1959, pp. 118-121. 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房、一九七三年、一五六～一六〇頁。および、Erikson, E. H. Erikson, J. M. *The Life Cycle Completed*, W. W. Norton & Co. Inc., 1998, pp.28-34. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』みすず書房、二〇〇一年、三一～三七頁。

(3) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社、一九七八年。

(4) Erikson, E. H. Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. *Vital involvement in old age*, Norton, New York,1986. 朝永正徳・朝永梨枝子訳『老年期』みすず書房、一九九〇年、二五八頁。Erikson, E. H. Erikson, J. M. *op. cit.*, p.61. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳、前掲書、七九頁。

(5) 詫摩武俊・依田　明『性格』大日本図書、一九六一年。

(6) Erikson, E. H. *op. cit.*, p.89. 小此木啓吾訳編、前掲書、一一一頁。
(7) 小林多寿子『物語れる「人生」自分史を書くということ』学陽書房、一九九七年、二一七頁。
(8) Erikson, E. H. Erikson, J. M. *op. cit.*, p.60. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳、前掲書、七六～七七頁。
(9) 越川房子「アイデンティティ（17章）」、青柳肇・杉山憲司編著『パーソナリティ形成の心理学』福村出版、一九九六年、三四七頁。
(10) Erikson, E. H. Erikson, J. M. *op. cit.*, p.77. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳、前掲書、一〇四頁。
(11) 岡本祐子「中年期――自己実現をめぐって（第Ⅷ　2章）」、小川捷之・斉藤久美子・鑪幹八郎編『臨床心理学大系　第3巻　ライフサイクル』金子書房、一九九〇年、二〇五頁。
(12) 小林多寿子、前掲書、二一六頁。
(13) 三浦綾子『道ありき〈青春編〉』新潮社、新潮文庫版、一九六九年。
(14) 三浦綾子『この土の器をも〈道ありき第二部　結婚編〉』新潮社、新潮文庫版、一九七〇年。
(15) 三浦綾子『光あるうちに〈道ありき第三部　信仰入門編〉』新潮社、新潮文庫版、一九七一年。
(16) 三浦綾子『命ある限り』角川書店、角川文庫版、一九九六年。

追　記　E・H・エリクソンの漸成的発達期における各発達段階の対立命題については、本書の一一頁および一三頁の表1・表2を参照されたい。

石橋通江